

大学体育実技の学生による授業評価に関する比較研究（第2報）

—性別による評価特性と意欲向上のための授業改善について—

A Comparative Study on the Evaluation of Physical Education Classes by the University Students

—Evaluation characteristic by sex and the class improvement of
the improved motivation straightening—

多胡陽介・永田靖章*
Tago Yousuke and Nagata Yasuaki

要 旨

本研究の目的は、本学学生による体育実技の授業評価結果に基づき、今後の授業改善のための基礎的資料を得ようとした実践研究である。対象は、授業を受講した四年制大学部生（人間心理学科）と短期大学部生（企業マネジメント学科・介護福祉学科）の日本人男女学生とし、前期授業の全種目とした。

結果は、全対象学生の授業評価は、女子学生よりも男子学生の方が好意的であった。しかし、短期大学部における授業評価を検討した場合には、顕著な男女の差はみられなかった。また、授業への意欲をさらに向上させるには、男性では、体系的な内容であること、興味ある内容であることの2点であった。女性では、学生を十分に掌握していることであった。

Key Words：大学体育実技、授業評価、授業改善、実践研究、重回帰分析

I. 緒言と問題の設定

文部科学省が平成16（2004）年3月に発表した「大学における教育内容等の改革状況について」の報告によると、現在、全国の8割以上の大学が学生による授業評価を実施している。こうした授業評価の制度は、1950年代にアメリカで生まれ、学生達が自主的に実施したのが始まりと言われる¹⁾。その後、1960年代後半になると「学生サービス」や「情報公開」の観点から全米

* 岡崎女子短期大学

の多くの大学で制度化されたが、日本では、10年ほど前まで、ほとんど実施されてこなかった。その理由として、日本の大学では、「教育」そのものにあまり目を向けられてこなかった風土があり、多くの大学教員は、研究への関心が高かったことが挙げられる。

こうした中、教育とその向上に目を向けるきっかけとなったのが、平成3（1991）年の大学審議会答申「大学教育の改善について」であり、各大学が自らの責任において教育研究の不断の改善を図ることを促すための自己点検・評価のシステムを導入することが提言された²⁾。これを受けて、大学設置基準が改正され、自己点検・評価を実施することが努力義務となった³⁾。さらに、平成11（1999）年には、自己点検・評価は義務化された上に、自己点検・評価結果について外部者による検証（外部評価）が努力義務化された⁴⁾。そして、現在では、全国のほとんどの大学が学生による授業評価を実施し、その結果を外部に向けて公開している。

筆者らは、平成15（2003）年度に、四年制大学部と短期大学部のスポーツ実技受講者に対して、独自の学生による授業評価アンケートを実施した⁵⁾。その結果から、四年制大学部と短期大学部、学科や性別、国籍の違いによって授業評価が異なる傾向にあるため、受講者の内容によって、指導の仕方を使い分けなければならないことが示唆された。しかし、学部や学科、性別、国籍の全てにおいて、授業評価に差があり、互いの評価結果に干渉していることから、明確な学科や男女の特性が明らかにできなかった。

そこで、第2報となる本研究では、国籍の違いによる影響を無くすため、平成15（2003）年度に実施した大学スポーツ実技の授業評価アンケートの中から、留学生の評価結果を研究対象から除き、日本人の性別による授業評価の違いについて検討した。そして、学生による授業評価から授業改善の方策を探り出すことを主目的とした。

さらに、学生各個人の目標を達成し、成果を高めるには、個々の活動意欲をいかに高めるかが重要であることから⁶⁾、スポーツ授業への意欲を高めるには、どのような点について改善すれば良いか、重回帰分析を用いて検討した。

Ⅱ. 研究の対象と方法

1. 研究の対象

1) 対象の授業

聖泉大学における「スポーツ実技」「体育実技」の全授業

2) 対象の授業のねらい

「学生各個人の現在持っている各スポーツの能力を基に、積極的な関心・意欲・態度で各授業内容に取り組み、試行錯誤と相互交流活動の中で思考力・判断力・応用力を養い、技能や知識・理解力を習得し、生活スポーツ化できるようになること」

3) 対象の授業内容；（ ）内は短期大学部

- (1)オリエンテーション：1単位時間（1単位時間）
- (2)インディアカ：4単位時間（4単位時間）
- (3)ユニバーサルホッケー：4単位時間（3単位時間）
- (4)ソフトバレーボール：5単位時間（4単位時間）
- (5)まとめの会：1単位時間（1単位時間）

4) 対象授業の方法と学習形態

授業の形態は、グループ学習で、ニュースポーツを行い、四年生学部は2名のチーム・ティーチングで行った。

5) 対象の学生

(1) 人間学部人間心理学科

第1学年日本人受講学生：男子26名、女子7名

(2) 短期大学部企業マネジメント学科

第1学年日本人受講学生：男子6名、女子8名

(3) 短期大学部介護福祉学科

第1学年日本人受講学生：男子11名、女子10名

2. 調査の期間

平成15年4月～平成15年7月の第1セメスター

3. 研究の内容（学生による授業評価の内容）と調査方法

(1)調査の内容

指導者自身の授業における教育内容や教育方法の改善を行うために、以下の12項目を設定した。

- | | |
|-------------|-----------|
| ①体系的な内容 | ②解りやすい説明 |
| ③聞き取りやすさ | ④興味のある内容 |
| ⑤効果的な説明 | ⑥価値のある内容 |
| ⑦学生への参加の促し方 | ⑧適切な助言や相談 |
| ⑨クラスのまとめ方 | ⑩積極的な出席 |
| ⑪意欲的な取り組み | ⑫他の学生への推奨 |

(2)調査の方法

回答は、「大いにある」から「全くない」までの五段階尺度法によって、各学生の主観的確率で記入をした。この他に、自由記述による授業に関する学生の意見や要望を記載した。

なお、調査は、各種目の最終授業の終了直後に行った。

4. 研究の手続き

(1)比較研究の視点

本研究においては、本学における学生による授業評価の結果を以下の4つの観点で分析し、比較研究を行った。

- ①全対象学生の性別による比較検討
- ②四年制学部の性別による比較検討
- ③短期大学の性別による比較検討
- ④学科別の男性・女性の比較検討

(2)分析の方法

それぞれの研究の視点ごとに、調査内容の各項目ごとの平均値と標準偏差とを算出し、その結果をt-検定を用いて比較検討した。

また、各項目が学生の意欲向上に与える影響を検討するために、意欲的な

取り組み（y）を目的変数におき、体系的な内容（x1）、解りやすい説明（x2）、聞き取りやすさ（x3）、興味のある内容（x4）、効果的な説明（x5）、価値のある内容（x6）、学生への参加の促し方（x7）、適切な助言や相談（x8）、クラスのまとめ方（x9）の9項目を説明変数において、重回帰分析を行った。（ ）内は、回帰式を示す際に用いた各項目の文字列である。

Ⅲ. 研究の結果と考察

1. 全対象学生の性別による比較検討

図1は、全対象学生における男性と女性の平均値を示したものである。また表1は、全対象学生における男性と女性の平均値と標準偏差及びt-検定結果を表したものである。

図1より、全体的には、出席を除いて、すべての平均値で女性より男性の方が高かった。また、表1より、効果的な説明、学生掌握、出席の3項目を除く、すべての項目において、女性より男性の方が有意に高い平均値であった。

これらの結果から、男性より女性の方が、授業に対して、十分な説明や助言、援助を求めているものと考えられる。また、共通点として、助言があったか、学生を掌握していたか、説明の仕方はよかったかの3項目は、男女と

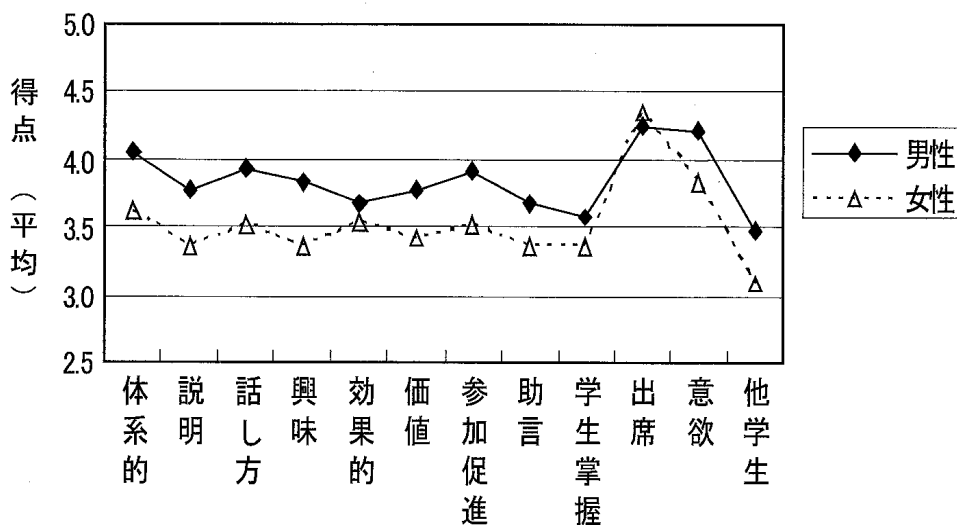


図1 全対象学生による男女別 得点グラフ

表1 全対象学生による男女別の平均値と標準偏差

	男 性		女 性	
	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差
体系的	4.0 (3)	0.95	3.6 [*] (3)	0.86
説明	3.8 (6)	0.87	3.4 [*] (7)	0.84
話し方	3.9 (4)	0.96	3.5 [*] (4)	1.02
興味	3.8 (6)	1.12	3.4 [*] (7)	1.20
効果的	3.7 (9)	1.01	3.5 (4)	1.01
価値	3.8 (6)	1.13	3.4 [*] (7)	0.96
参加促進	3.9 (4)	0.91	3.5 [*] (4)	0.95
助言	3.7 (9)	0.93	3.4 [*] (7)	0.98
学生掌握	3.6 (11)	1.01	3.4 (7)	1.00
出席	4.3 (1)	1.12	4.3 (1)	1.01
意欲	4.2 (2)	0.99	3.8 [*] (2)	1.13
他学生	3.5 (12)	1.19	3.1 [*] (12)	1.26

* P<0.05

にも低い順位の傾向であった。したがって、これら3項目については、特に改善する必要がある。

学生を掌握していたかについては、技術説明のために一旦練習を止めさせ、何度も集合させることが多かった。そのため、集合する毎に無駄な時間を要し、集団の動きも悪くなった。効率的に集団を動かすよう常に心掛けると共に、事前準備として集団への指示を明確にしておくことが考えられる。また、説明の仕方については、技術について説明する際、一度に多くの事を説明する傾向にあったので、数回に分けて説明するよう改善する。さらに、助言があったかについて、各個人への助言は十分に出来ていなかった。学生が練習に取り組んでいる際は、各個人の動きを鋭く観察し、適切なアドバイスができるよう心掛ける必要がある。

次に、全対象学生の男性による各項目の重回帰分析を行った結果、以下の回帰式が成り立つことが証明された。(重相関係数R=0.73)

$$y = 0.28x_1 + 0.07x_2 + 0.05x_3 + 0.26x_4 - 0.18x_5 + 0.29x_6 - 0.09x_7 \\ + 0.15x_8 + 0.004x_9 + 0.94$$

上記の式の回帰係数の中で、危険率が5%未満の項目は、x1（体系的：P<0.01）、x4（興味：P<0.05）、x6（価値：P<0.01）の3項目であった。これらの結果から、男子学生の意欲を高めるには、体系的な内容であること、興味ある内容であること、価値があることの3点であるといえる。特に、価値あることが意欲を高めるために最も影響していることがわかった。このことから、学生にとって、どのような価値観を体育授業に求めているかを十分に考える必要があるといえる。

次に、全対象学生の女性による各項目の重回帰分析を行った結果、以下の回帰式が成り立つことが証明された。（重相関係数R=0.76）

$$y = 0.17x_1 - 0.16x_2 - 0.09x_3 + 0.11x_4 + 0.11x_5 + 0.52x_6 - 0.12x_7 - 0.22x_8 + 0.56x_9 + 0.84$$

上記の式の回帰係数の中で、危険率が5%未満の項目は、x6（価値：P<0.01）、x9（学生掌握：P<0.01）の2項目であった。これらの結果からいえることは、女子学生の意欲を高めるには、価値があること、学生を掌握していることの2点であるといえる。価値ある内容であったかについては、男子学生と共通していた。学生を掌握していたかについては、受講人数が多かったため、授業の中盤まで名前と顔が一致しない学生もいた。出来るだけ早期に憶えるよう心掛ける。

2. 四年制学部の性別による比較検討

図2は、四年制学部である人間心理学科の男性と女性の平均値を示したものである。また表2は、人間心理学科の男性と女性の平均値と標準偏差及びt-検定結果を表したものである。

全体としてこの結果からいえることは、女性より男性の方が好意的な授業評価をしていることである。また、体系的であるか、説明の仕方は良かったか、話は聞き取りやすかったか、価値があったか、参加を促したか、助言はあっ

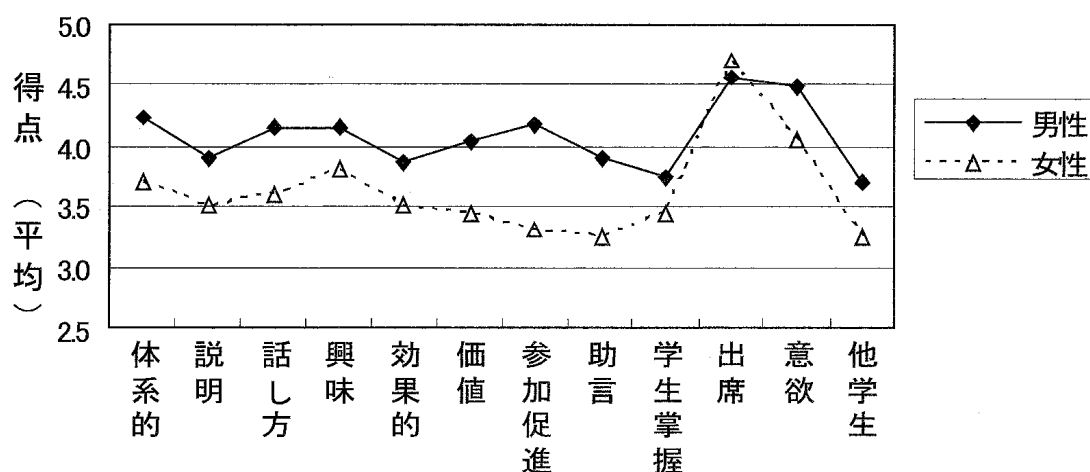


図2 四年制学部における男女別 得点グラフ

表2 四年制学部における男女別の平均値と標準偏差

	男性		女性	
	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差
体系的	4.2 (3)	0.80	3.7*(4)	0.66
説明	3.9 (8)	0.80	3.5*(6)	0.69
話し方	4.1 (5)	0.74	3.6*(5)	0.82
興味	4.1 (5)	0.87	3.8 (3)	0.89
効果的	3.9 (8)	0.80	3.5 (6)	0.69
価値	4.0 (7)	1.01	3.5*(6)	0.69
参加促進	4.2 (3)	0.76	3.3*(10)	0.66
助言	3.9 (8)	0.84	3.3*(10)	0.64
学生掌握	3.7 (11)	0.89	3.5 (6)	0.60
出席	4.6 (1)	0.70	4.7 (1)	0.57
意欲	4.5 (2)	0.70	4.1*(2)	0.83
他学生	3.7 (11)	1.10	3.3 (10)	0.91

*P<0.05

たか、意欲的に取り組んだかの7項目について有意な差が認められた。平均値の順位にも差がみられ、参加を促したかについては、男性で3位、女性では10位という結果であった。特に女性には、積極的に授業へ参加するよう働きかける必要がある。共通点としては、助言を与えたかについて、男性、女性ともに低い得点順位であった。前述したように改善していきたい。

次に、人間心理学部の日本人男性の各項目の重回帰分析を行った結果、以下の回帰式が成り立つことが証明された。(重相関係数R=0.69)

$$y = 0.19x_1 + 0.17x_2 - 0.02x_3 + 0.11x_4 - 0.03x_5 + 0.32x_6 + 0.05x_7 \\ - 0.02x_8 - 0.10x_9 + 1.70$$

上記の式の回帰係数の中で、危険率が5%未満の項目は、 x_6 （価値： $P < 0.01$ ）の1項目であった。これらの結果からいえることは、男子学生の意欲を高めるには、価値ある内容にすることといえる。

また、人間心理学部の日本人女性の各項目の重回帰分析を行った結果、以下の回帰式が成り立つことが証明された。（重相関係数 $R = 0.87$ ）

$$y = -0.05x_1 - 0.42x_2 - 0.11x_3 + 0.76x_4 + 0.83x_5 - 0.48x_6 + 0.04x_7 \\ - 1.32x_8 + 0.02x_9 + 6.10$$

上記の式の回帰係数の中で、危険率が5%未満の項目は、 x_4 （興味： $P < 0.01$ ）と x_8 （助言： $P < 0.01$ ）の2項目であった。これらの結果からいえることは、女子学生の意欲を高めるには、興味ある内容であること、十分な助言があることの2点であるといえる。

3. 短期大学の性別による比較検討

図3は、短期大学部である企業マネジメント学科と介護福祉学科の男性と女性の平均値を示したものである。また表3は、短期大学の男性と女性の平均値と標準偏差及びt-検定結果を表したものである。

全体としてこの結果からいえることは、各項目の平均値に有意な差はみられず、顕著な男女の差はないということである。相違点としては、各項目から、興味ある内容であったかについて、男性で6位、女性で11位と平均値の順位に差があった。共通点としては、十分な助言があったか、学生を掌握していたかの項目について、男女とも共通して平均値の順位が低い結果であった。また、短期大学の日本人男性の各項目の重回帰分析を行った結果、以下の回帰式が成り立つことが証明された。（重相関係数 $R = 0.74$ ）

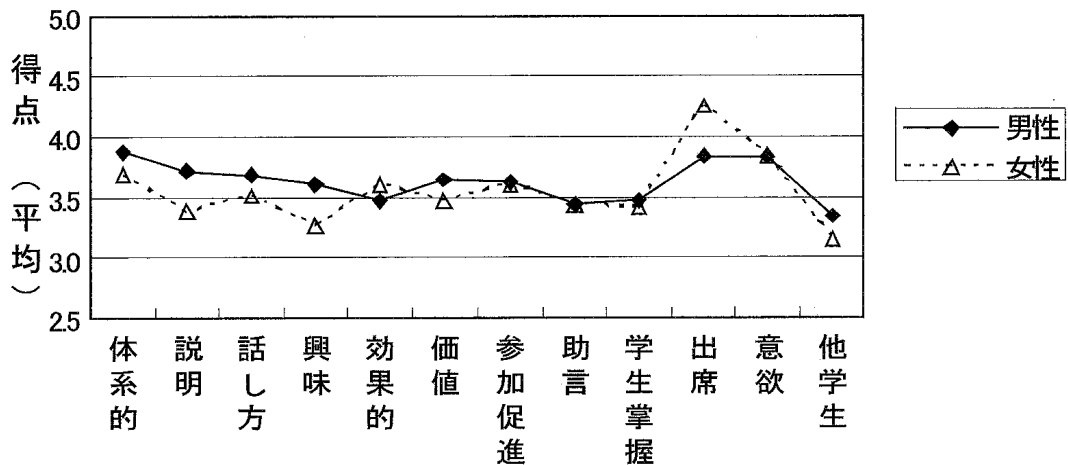


図3 短期大学部における男女別 得点グラフ

表3 短期大学部における男女別の平均値と標準偏差

	男性		女性	
	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差
体系的	3.9 (1)	1.14	3.7 (3)	0.96
説明	3.7 (4)	1.01	3.4 (8)	0.93
話し方	3.7 (4)	1.23	3.5 (6)	1.06
興味	3.6 (6)	1.30	3.3 (11)	1.27
効果的	3.5 (9)	1.31	3.6 (4)	1.11
価値	3.6 (6)	1.24	3.5 (6)	1.06
参加促進	3.6 (6)	1.04	3.6 (4)	1.02
助言	3.4 (11)	1.08	3.4 (8)	1.06
学生掌握	3.5 (10)	1.19	3.4 (8)	1.12
出席	3.8 (2)	1.38	4.3 (1)	1.08
意欲	3.8 (2)	1.27	3.8 (2)	1.22
他学生	3.3 (12)	1.31	3.1 (12)	1.38

*P<0.05

$$y = 0.53x_1 + 0.1x_2 + 0.04x_3 + 0.29x_4 - 0.39x_5 + 0.2x_6 - 0.28x_7 \\ + 0.38x_8 + 0.08x_9 + 0.38$$

上記の式の回帰係数の中で、危険率が5%未満の項目は、x1 (体系的: P<0.05) の1項目であった。これらの結果からいえることは、男子学生の意欲を高めるには、体系的な内容にすることといえる。各スポーツには競技ルールがあるが、技術の習得度に応じて、ルールを厳格化していくなど体系的

な授業になるよう工夫する。

また、短期大学の日本人女性の各項目の重回帰分析を行った結果、以下の回帰式が成り立つことが証明された。（重相関係数R = 0.84）

$$y = 0.36x_1 - 0.41x_2 - 0.1x_3 - 0.08x_4 + 0.1x_5 + 0.7x_6 - 0.09x_7 + 0.05x_8 + 0.4x_9 + 0.49$$

上記の式の回帰係数の中で、危険率が5%未満の項目は、x6（価値：P<0.01）の1項目であった。これらの結果からいえることは、女子学生の意欲を高めるには、価値ある内容にすることといえる。

4. 学科別の男性・女性の比較検討

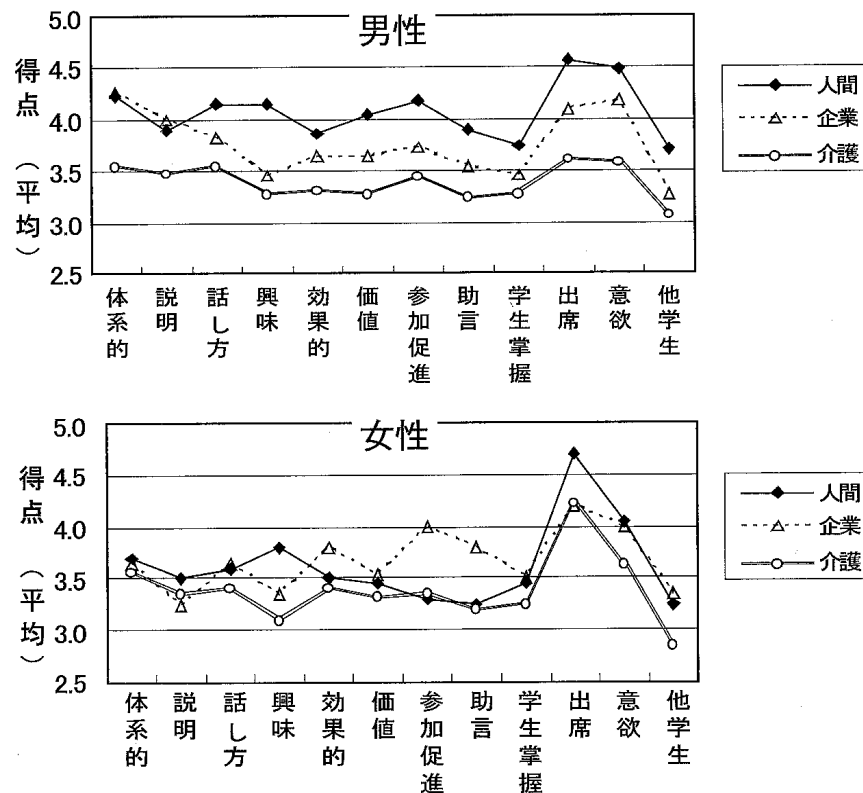


図4 各学科の男性・女性の得点グラフ

図4は、各学科の男性と女性の平均値を示したものである。また、表4は、各学科の男性と女性の平均値と標準偏差を表したものである。さらに、表5

表4 各学科別の男性及び女性の平均値と標準偏差

	男性 平均 (標準偏差)			女性 平均 (標準偏差)		
	人間	企業	介護	人間	企業	介護
体系的	4.2 (0.80)	4.3 (0.79)	3.5 (1.14)	3.7 (0.66)	3.7 (0.99)	3.6 (0.91)
説明	3.9 (0.80)	4.0 (0.77)	3.5 (0.97)	3.5 (0.69)	3.3 (1.02)	3.3 (0.83)
話し方	4.1 (0.74)	3.8 (1.08)	3.5 (1.20)	3.6 (0.82)	3.7 (1.09)	3.4 (1.10)
興味	4.1 (0.87)	3.5 (1.21)	3.3 (1.34)	3.8 (0.89)	3.4 (1.35)	3.1 (1.23)
効果的	3.9 (0.80)	3.6 (1.12)	3.3 (1.29)	3.5 (0.69)	3.8 (1.11)	3.4 (1.10)
価値	4.0 (1.01)	3.6 (1.03)	3.3 (1.26)	3.5 (0.69)	3.6 (1.28)	3.3 (0.90)
参加促進	4.2 (0.84)	3.7 (0.90)	3.4 (1.04)	3.3 (0.66)	4.0 (0.97)	3.3 (1.00)
助言	3.9 (0.76)	3.5 (1.04)	3.2 (0.94)	3.3 (0.64)	3.8 (1.01)	3.2 (1.09)
学生掌握	3.7 (0.89)	3.5 (1.13)	3.3 (1.14)	3.5 (0.60)	3.5 (1.00)	3.3 (1.19)
出席	4.6 (0.70)	4.1 (1.30)	3.6 (1.50)	4.7 (0.57)	4.2 (1.28)	4.2 (1.01)
意欲	4.5 (0.70)	4.2 (0.87)	3.6 (1.28)	4.1 (0.83)	4.0 (1.52)	3.6 (1.01)
他学生	3.7 (1.10)	3.3 (0.90)	3.1 (1.36)	3.3 (0.91)	3.4 (1.42)	2.8 (1.32)

表5 各学科別の男性及び女性の検定結果(数字は危険率を示す)

	男性			女性		
	人間：企業	企業：介護	人間：介護	人間：企業	企業：介護	人間：介護
体系的	0.90	0.05	0.0007***	0.85	0.75	0.56
説明	0.69	0.11	0.02*	0.37	0.72	0.48
話し方	0.20	0.49	0.003***	0.87	0.44	0.50
興味	0.02*	0.69	0.0002***	0.22	0.48	0.03*
効果的	0.41	0.45	0.01*	0.31	0.22	0.74
価値	0.22	0.39	0.002***	0.76	0.43	0.56
参加促進	0.08	0.41	0.0001***	0.01*	0.02*	0.86
助言	0.22	0.36	0.0008***	0.04*	0.04*	0.82
学生掌握	0.34	0.64	0.03*	0.85	0.44	0.49
出席	0.07	0.34	0.00004***	0.12	0.95	0.06
意欲	0.19	0.15	0.00001***	0.90	0.29	0.12
他学生	0.22	0.65	0.02*	0.79	0.20	0.23

***P<0.01 **P<0.05

は、各学科の男性と女性の t 検定の結果を表している。

この結果から、全体的には、人間心理学科・企業マネジメント学科・介護福祉学科の順で平均値が低くなっていることがわかる。特に、人間心理学科と介護福祉学科の比較では、全ての項目に有意な差がみられた。このことから、男性では、学科ごとで授業に対する学生の認識が異なり、学科の特性や

雰囲気、授業評価に少なからず影響していることを示している。男性では、学科の特性も考慮して指導を行う必要があるといえる。しかし、共通点もみられ、体系的な内容であったか、話は聞こえやすかったか、参加を促進したかの項目は、共通して高い平均値であった。逆に、学生を掌握していたかの項目は、共通して低い平均値であったので、特に改善する必要がある。

女性では、全体的には、各学科の比較において大きな差はみられない。このことは、女性ではスポーツ授業に対する認識に関して、学科の影響はあまりないことを示している。相違点としては、興味ある内容であったかについて、各学科で平均値に差がみられる。ニュースポーツといわれるインディアカやユニホックという種目を実施したことにより、各個人における興味に差が生じたと考えられる。共通点としては、説明の仕方は良かったか、学生を掌握していたかの項目において、共通して低い平均値であったので、特に改善する必要がある。

男性と女性の比較では、男性では、出席したか、意欲を持って取り組んだかの項目について、平均値がほとんど変わらないのに対し、女性では、出席したかの項目に比べ、意欲が低い傾向となっている。また、男女共通して、学生掌握の項目については、低い平均値となっているので、特に工夫・改善する必要がある。

IV. 研究の要約と総括

表6に示すように、全体的には、男性と女性で授業評価に差はあるものの、四年制大学では、男女に大きな差がみられ、短期大学部では顕著な差がみられなかった。このことは、男性ではスポーツに対する捉え方が多種多様であり、集団の雰囲気や学科の特性が授業評価に影響されやすいことを示唆している。これらから、今後の指導に活かすには、学部や集団の特性をよく把握し、その特性に応じた指導をしなければならないといえる。女性では、集団の雰囲気や学科の特性に、あまり左右されずに授業を評価しているといえる。しかし、説明の仕方は良かったか、学生を掌握していたかは、低い評価であ

表6 研究結果の要約

対象学生	全体的傾向	男女共通点	男女相違点
全対象学生	男性の方が好意的評価	意欲を高めるには価値があること	男性：体系的、興味、価値 女性：学生掌握、価値
四年制学部	男性の方が好意的評価	教員の助言に対し低い評価	男性：価値 女性：興味、助言
短期大学部	男女の差は見られない	教員の助言・掌握に対し低い評価	男性：体系的 女性：価値

ったので、特に改善する必要がある。

授業への意欲を高めるには、体系的な内容であることや価値があること、学生を十分に掌握していることの影響が強かった。このことから、学生にとって、どのような価値観を体育授業に求めているかを十分に考え、体系的な授業内容にする必要がある。また、十分に学生を掌握し、一人一人の学生について深く指導する必要があるといえる。

引用文献

- 1) F, ルドルフ アメリカ大学史 pp433-443 玉川大学出版部 2003
- 2) 高等教育研究会 大学の多様な発展を目指してI pp1-9 ぎょうせい 1991
- 3) 例えば、愛知教育大学 自己点検・評価報告書(2000年度) pp34-35
愛知教育大学 2001
愛知教育大学 年次報告書(2000) pp30-34 愛知教育大学 2001
愛知教育大学 2000年度学生による授業評価調査 pp23-31 愛知教育大学 2000
- 4) 市川須美子他 平成15年版 教育小六法 pp233-239 学陽書房 2003
- 5) 多胡陽介他 聖泉論叢第11号 pp39-59 聖泉大学学会 2004
- 6) 永田靖章 スポーツ集団のマネジメント pp162-166 ぎょうせい1998